

13 日本外科学会の濫觴

佐藤 裕

明治三十二年（一八九九年）に発足した日本外科学会は、平成十一年に創立一〇〇周年を迎える。福岡への国立医科大学誘致のために度々上京していた福岡県立病院長大森治豊（東大シュルツ門下）、スクリバ門下の田代義徳（後の東大教授、日本整形外科の開祖）や佐藤三吉（東大初の邦人外科教授）が主唱して、普仏戦争後の一八七二年に創立された「ドイツ外科学会」に範をとり、日本の外科学の振興を目的として外科専門医が集う学会の設立を計った。日本外科学会誌の創刊号は、設立に至る経緯を以下のごとく伝えている。

「明治二十九年十月福岡病院大森治豊上京シ田代義徳及佐藤三吉ト謀リ外科専門諸子ニ移牒シテ日本橋区亀島町偕楽園ニ小集ヲ催ス 来り会スル者 曰 佐藤進 曰 菊

池常三郎 曰 片山芳林 曰 桂秀馬 曰 佐藤恒久 曰 丸茂文良 曰 三輪徳寛 曰 筒井八百珠 曰 伊藤準三及催主三人トス 宇野朗及橋本綱常二人ハ事故ニ由リ来ラズ 坐ニ発議スル者アリ 年一回此ノ如キ小集ヲ開キテ契濶ノ情ヲ慰ムル如何ト衆皆之ヲ賛シテ散ス 之ヲ日本外科学会ノ濫觴トナス」。

翌明治三十年には、設立を発議した者たちが三輪徳寛（千葉医専）、木村考蔵（大阪高等医学校）、田代正（長崎医専）らのドイツ留学壮行のために再び会し、同時に外科専門医会（外科学会の準備会的な）を開催した。さらに翌明治三十一年、日本外科学会発起人会を開き、明治三十二年四月東京において第一回日本外科学会を開催することを決した。会長として東大の佐藤三吉を、幹事として近藤次繁、佐藤恒久（順天堂）と田代義徳の三名を選出している。

かくして、明治三十二年四月一日ついに日本外科学会（Japan Surgical Society）の設立が成り、第一回集会が東京神田一ツ橋の帝国教育会講堂において開催された。三日間の会期中に、日本外科学会名誉会員に推挙された

日本外科学の大恩人であるスクリバの「クレエデ(Credé)氏銀療法」に始まる四十二題の演題が発表された。先駆的な外科医達が主としてドイツ(佐藤進はウィーンのピルロートやベルリンのバルデレーベンのもとへ、橋本綱常はさらにランゲンベックのもとへ)に留学したことや、日本の外科学を育てたスクリバがドイツ外科学会創設者として名を連ねるSimon(ハイデルベルグ大学、最初の腎摘に成功)の門下であったことなどが影響してか、演題の内容はドイツ外科学を反映したものが多し。二日目に第二回を東京にて佐藤進(順天堂佐藤尚中の後継者、陸軍軍医総監)会長のもとで開催することを議決し、閉会后上野精養軒にて懇親会を催した。以後、発起に名を連ねた人々が持ち回りのちに学会を主催していくが、大正十四年には九州帝国大学第一外科三宅速教授を会長として、福岡において第二十六回学会が開催された。この時田代義徳、近藤次繁両教授が、大森治豊を讀えて次のような追悼文(抜粋)を捧げた。「花輪を故大森治豊君の銅像の前に捧げ 蕪辞を陳べて君の靈に告ぐ 君は我が日本外科学会の主唱者なり―東京へ上らるる毎に我が邦に於ける外科学者会合

の必要なるを力説せらる―我等も共鳴し明治三十二年東京に開くに至る―爾來益々隆盛を極め第二十六回会合を福岡市に開くに至る―寧ろ其遅きを憾まざるを得ず―何となれば君が池田陽一博士と共に明治十八年帝王切開に由りて一母子の生命を救い得たる空前の大成績は福岡病院廃止論をして永久に閉念せしめ遂に今日の九州帝国大学建設の基礎を成すに至り 君は当福岡をして我が国に於る「アゼブチッセ ヒルルギー」の完成に先鞭を着けたるの榮譽を担わしめた士なればなり」。日本外科学会の創設に果たした大森治豊の功績の大きさが十二分に窺われる文である。

以後九十有余年が経過し、本年(一九九七年)第九十七回外科学会が、京都において京都府立医大高橋俊雄教授会長のもとに「独創と変革の外科」をメインテーマに開催された。

(福岡赤十字病院外科、九大医史学資料研究会)